

パネル

とまとまりの仏教が要請されるという面があり、また一つには既に見た聞き手としての知識人の問題がある。すなわち聞き手が仏教についての知識を保持していることを前提できない以上、世俗的な知の範疇において、すなわち世俗の言葉において総体としての仏教を説く必要があると考えられていたのである。

最後に、こうした仏教演説の演説筆記について考えるならば、『仏教演説集誌』や『明教新誌』といった雑誌や新聞、あるいは多くの仏教演説本によって流通していくのであり、また逆に新聞や雑誌上に掲載された宗教論が仏教演説本に転載されることもあった（『仏教演説雄弁集』）。このように見るならば、仏教演説が盛んに行われたのは確かにある一時期のことであったけれども、そこで試みられた仏教を世俗の言葉において論じるという営み自体は、少なくとも知識人の間においてある種一般化していくのではないか。この問題を明治中期以降における知識人による仏教論、あるいは宗教論との関わりにおいて考えることを次の課題としたい。

## 演説・講演というメディアと近代仏教

——啓蒙から修養へ——

岡田正彦

明治維新によって、仏教各派は従来の伝統の多くを刷新し、組織的にも制度的にも再出発することになり、近世社会のなか

で人々の生活に浸透していた仏教は、新たな社会や文化の枠組みのもとで自らを再構築することになる。人々を教化する手段として、広く定着していた「節談説教」に代わって、「仏教演説」という新たな手法が採択されたこともその一つであろう。

明治一〇年代に、自由民権運動の隆盛とともに広がった「演説」文化を背景として、「仏教」を語る新たなメディアとして登場した「仏教演説」は、当初はキリスト教や排仏思想に対抗し、仏教の立場を理論的に擁護することを主な目的としていたが、次第に人々の教化と布教の手段に転換していく。この過程において、人々の教化の手段としては、変わらぬ影響力を持ち続けていた「節談説教」の伝統は次第に衰退し、演説という新しいメディアが、仏教思想の理論面ばかりでなく、信仰についても語る役割を担うようになる。この時期に、西洋式の修辞法や弁論術を本格的に導入しながら、独自の宗教論を展開したが、加藤咄堂（一八七〇—一九四九）であった。咄堂は、『明教新誌』や『中外日報』といった仏教系新聞の主筆を歴任し、最盛期には年間二〇〇回を超える講演を行い、難解な思想や古典を平易に説く演説の名手として、人気を博した。

咄堂は、その膨大な著作や講演録のなかで、度々修辞法や弁論術について論じているが、最もまとまったかたちで残されているのは、明治四一年に刊行された『雄弁法』である。本書によれば、演説に必要なのは、自らの思想や主張を率直に聴衆に伝えることであって、話芸を楽しむことではない。咄堂にとって、演説の修辞法は人々により広く、深くメッセージを伝えるための技法であって、話芸自体を楽しむ説教とは、その趣

が大きく異なるのである。定められた台本の内容を巧みな話芸によって人々に伝える伝統的な説教と、自らの思想や主張を人々に伝える演説では、弁舌の役割が根本的に異なっている。落語の源流ともされる「節談説教」を聞きに集まる聴衆は、説教者の思想や主張を理解することよりも、話芸を楽しむことを求めている。説教のなかに組み込まれた教訓や経典の一節が、人々の心に沁み入ることはあつたであろうが、ここでは理論的な説明よりも情感が重視されている。

一方、自己の思想や主張を人々に伝えるメディアとしての演説・講演にとつては、内省的に自らを語るものが重要なのである。話芸によって人々を楽しませることは、副次的な目的になる。宗教的な講演・演説にとつては、自らの信仰を語り、教えの内実あるいは正当性を人々に納得させることが重要なのである。演説の目的は、人々の意識を変革する「教化」であつて、これが宗教的な教化活動として行われる場合には「布教」になる。

近世の「節談説教」の歴史的研究を中心に、日本の「話芸」の文化史を研究した、関山和夫は、「一人前の説教者になるためには、師匠の随行をするという修業の方法は、昭和十年代をもって終止符を打った」としている。この後は、各宗の大学で学問や教養を身につけた僧侶たちが、人々の教導を担うことになる。従来の近代仏教史では、あまり注目されてこなかった側面の一つであるが、自らの信仰を語り、人々を教導するための手法が、このように大きく変化したことは、「近代仏教（さらには「日本の近代」）とは何か」という問いにとつて、無視す

ることのできない意味を持っているのではないだろうか。

当時の仏教界を取り巻く、政治的・社会的・文化的状況と深く関わりながら、演説・講演というメディアを通して仏教思想について語り続けた、加藤咄堂の活動は、新たなメディアを通じて語り直された「仏教／宗教」の歴史性について考えるうえで、極めて興味深い題材を提供してくれるのである。

### 前田慧雲と「自由討究」

——本願寺教団の対応と宗学研究法——

岩田 真美

「自由討究」とは、宗教的伝統に対する「自由討究」という態度・方法であり、教権教条に束縛されず、自由に宗教の真理を発見することである。それは、明治二十年代から三十年代における仏教革新運動（新仏教運動）の中で主唱されたものであつた。活字メディアの発達、教育環境の整備は、「自由討究」という実践を可能にする大きな要因でもあつた。本発表では、真宗教学の近代化に大きな影響を与えたといわれる前田慧雲（一八五七—一九三〇）を取り上げ、前田における「自由討究」の主張と、活字メディアや学校教育との関わり、加えて、「自由討究」に対する（西本願寺）教団側の対応について検討する。

明治三十四年、本願寺派第二十六回定期集會において、「宗